

朝日町指定・民俗芸能

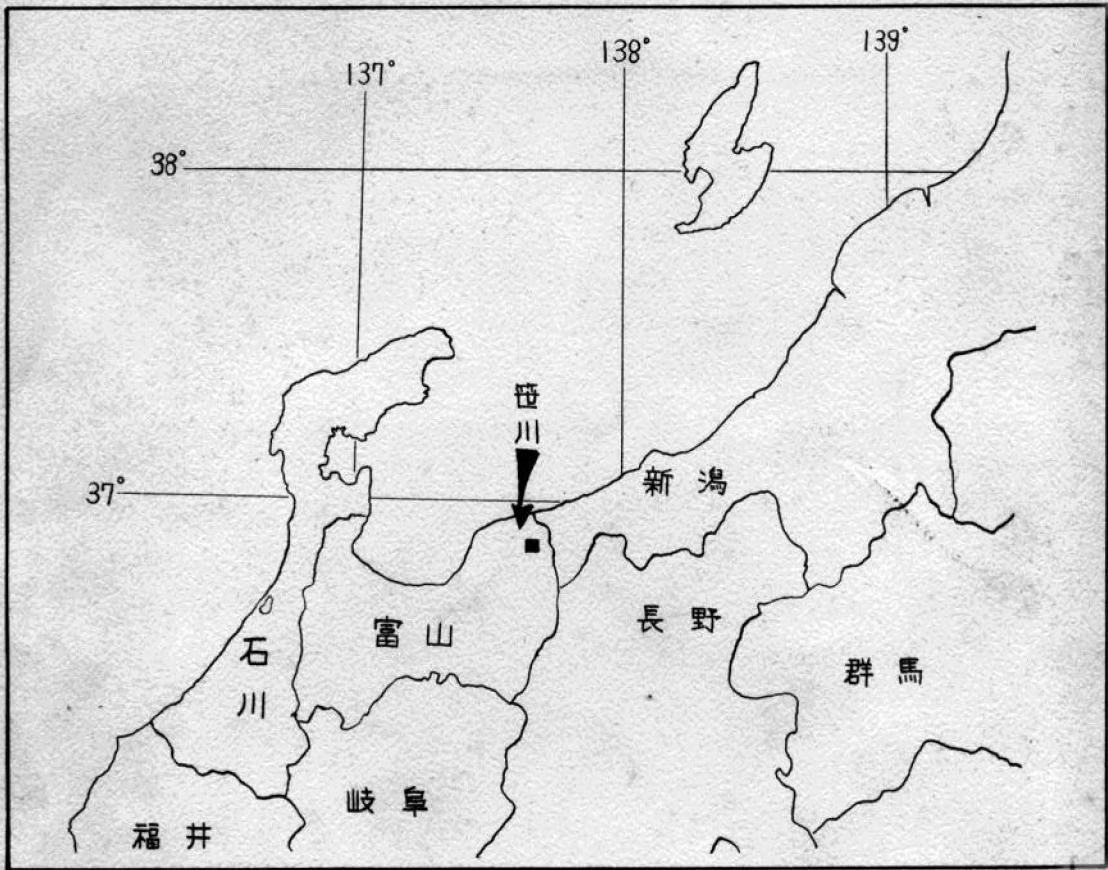
溪谷の村

# 笹川の獅子舞



朝日町・笹川地区

## ◎位置図



## =目次=

序文	1	第6章 獅子舞	
はじめに	2	(6-1) 装いと採り物	20~21
第1章 溪谷の村	3~4	(6-2) 舞ときまり	22~26
第2章 碓氷の流れ	5~8	(6-3) 村人の祈り	26
第3章 三社成立の幻想	9~14	第7章 保存の願い	
第4章 諏訪神社のあたり	14~15	(7-1) 歴代獅子舞奉納者	27
第5章 まつり		(7-2) 保存のための活動	28
(5-1) 祭の伝承	16~18	おわりに	29
(5-2) 祭の昼と夜	18~19	参考文献	30

# 序 文

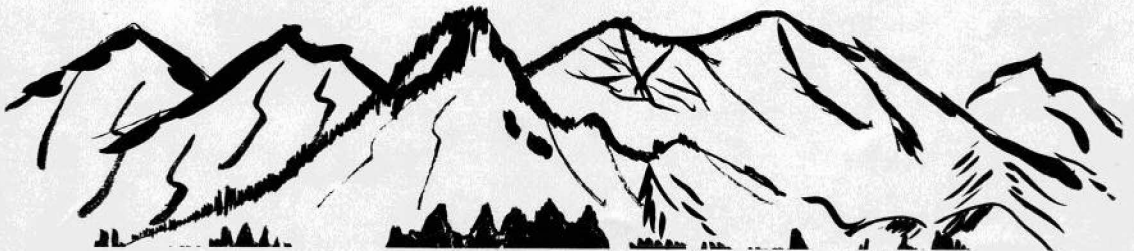


あれはもう20年も前のこととなろうか、8月27日諏訪神社の大祭の日、偶然にも画人岩崎巴人が拙宅を訪れたことがあった。よいところへきたと宿泊をすすめ、祭の夜の行事を紹介することにした。陽も落ちて涼しくなった頃、諏訪の森から響いてくる太鼓の音に吸いよせられるように集う村人達に混って、青年団の奉納する獅子舞の輪垣に加わった。呼せ笛もたん消え、高い拝殿から竹の葉の露払いを従がえた神樂がヨオーイ、ヨオーイと掛声も勇ましくかつぎだされた。輪垣の内では力強い太鼓と嫺々とした笛の音につれて、「悪魔払い」が舞われる。終ってホッと一息「直線的な舞だ、すばらしい!!」と巴人が洩らした。これも当時独自の画境を追って全国を放浪していた若い芸術家の心を、強く捕えたのであろう。続いて行なわれる「天舞」をくい入るように見ていたが、つい前の人を押しわけて乗りだし、いつになく心が高ぶっている様子であった。笹川に生まれ春秋2回の祭礼に見慣れた獅子舞が、旅の人の心をこんなに捕えるものであったかと、今更ながら見直したのである。あれ以来この祭事の顕彰を強く望んでいたが、時代の波は容赦なく古いものから遠ざかろうとし、年々減少する若者の数とともに、

## 笹川地区・公民館

館長 折谷 隆 一

存続をさえ危ぶまれるいらだたしさを痛感していたのである。幸い青年団が数年前から部落の歴史研究に手を染め、それが発展して獅子舞研究へと進んだようである。山村に留まる青年には、時代に取り残されるかの悩みと、相応の複雑な仕事を持たねばならない。何より安定した職場が遠くまちまちで、集会や話し合いの時を得るのに苦勞したことであろう。研究はきまって深夜にまで及んだようである。だが若者達は特有の情熱を注ぎ、寸暇をさいて資料の収集、作成にあたり、ようやくここに第一段階のまとめとしてこの冊子をだすにいたったのは嬉しい限りである。なお地区には、この祭事を伝承し育てて下さった古老があり、歴代奉納に直接獅子として参加された頑健な先輩の数々がある。これら各位の熱烈な後援に加えるに、考古学研究に挺身されている竹内俊一さんの蘊蓄あるアドバイスを得た青年団獅子舞研究会の研究物としては、まずまずの成功というべきであろう。ささやかながらこの発表が、祭に寄せる祈りの薄れかけた村人達に、心の灯をかきたてて、長く心の糧となり誇りともなって次代に引き継がれるよう、さらに郷土の文化財として、この真価を広く世に認めてもらうキッカケとなることを念願してやまない。





# ≡ はじめに ≡

マスコミと交通の普及や発達によって、北陸の静かな山合いの村に住んでいても、直接間接を問わず、全国各地の珍しい民俗芸能に接する機会が多くなりました。中でも私達は、笹川にも行なわれている「獅子舞」について特に関心が高く、演ずる舞の手振り、足運び、笛の音色などを注意してみると、笹川の獅子舞には、他府県のものとは若干異なっている点のあることに気付かされました。笹川の獅子舞は尾持ちを従えた獅子一匹に、天狗一匹が登場して行なうもので、他のそれと比較しても、舞のテンポはゆるく、全体のムードが神秘的で、又、手振りや足運びには伝統に支えられた規則の正しさを持つ重厚な感じを受けます。先年から当青年団では郷土史の研究に力を注いでいましたが、中世以前の文献資料の少ない笹川の歴史を解明するためには、今にして残された風習からみても、一村の氏神となっている諏訪社・八幡社・権現社の信仰や鎮座の源流と祭礼や行事伝承の研究が、その空白の相当部分を補うように考えられ切り離せないことに気付きました、そこで私達が全国的に珍しいと考えているこの獅子舞が、村人達の生活や風習とどの様な関連があり、又、いつ頃どこからどの様に伝播傳承されてきたかを探りはじめると一つの試みを考え、ついでに獅子舞からアプローチして笹川の歴史を解明してゆけたらと思いました。又、獅子舞についても、その中心となって奉じてきた青年層はもとより、村の老若総てがより深い理解と愛情を持ってとり行ない、村人の大きな楽しみでもあり、心の深いところにまで安らぎを持たせるとともに、今後長く保存したいと願い、これに取り組みました。

なおこの本を作成するにあたり、下記の人から多額の御寄付をいただきました。紙上を借りて厚く御礼もうしあげます。



深松幸太郎

深松組社長



折谷宝童  
(昭和45年10月16日逝去)  
元折谷工業K.K社長

## 指 導

竹内俊一 朝日町立宮崎小学校教諭  
朝日町文化財調査委員

## 資料提供

長井宝得 明治27年12月25日生  
竹内与松 明治15年6月2日生  
獅子舞保存会一同

## 研究会同人

折谷時夫	国 鉄	S. 21. 6. 17生
竹内俊宏	国 鉄	S. 22. 2. 1 "
竹内秀樹	鹿熊工業	S. 22. 12. 25 "
長井久幸	吉田工業	S. 24. 12. 3 "
勝田 正	国 鉄	S. 20. 8. 11 "
竹内益裕	国 鉄	S. 19. 9. 1 "
長井孝春	国 鉄	S. 23. 2. 8 "
長井史一	県 信 連	S. 21. 9. 14 "
小林茂和	国 鉄	S. 22. 4. 22 "
深松範男	朝日石油	S. 22. 11. 21 "



# 第1章 溪谷の村



日本海に臨む南を、城山(八幡神山)がさえぎる笹川は、四周を山に囲まれた溪谷の村である。

笹川は富山県の東端、朝日町の中心部から南東へ3 kmほど入った溪谷の村である。白馬山系の北端に聳える黒菱山(1043 m)に端を発する笹川は、北に向って全長5,89 km流れて日本海へ注ぐ間に標高100~400 mの丘陵を削って全線勾配20分の1の急傾斜谷をつくった。その侵蝕された南北に細長い谷合いの段丘に家並が重なる山村が、一つ獅子の舞う里である。総面積は約14 km<sup>2</sup>、その90%は山地で平地はわずかに川幅25 m前後の笹川兩岸の段丘と支谷に点在するため、耕して天に至る風景を各所で見ると、訪れるには、北陸本線泊駅から町通りを東に通るぬけ、山裾に通ずる国道8号線を横断、全長414 mのトンネルを抜けて川沿い道をたどると、約30分で村はずれに着く。集落は186戸、人口は725人である。村の主産業は農林業であるが、水田8960 a<sup>アール</sup>(1戸平均48 a<sup>アール</sup>)、畑1524 a<sup>アール</sup>(1戸平均8 a)、山林17700 a(1戸平均95 a)と少ないため、古くから労働人口の中心を占める男子の多くは農閑期になると留守の農作業は老人や

妻に任せ、土木工事場の出稼ぎや山奥に入って豊富な雑木を利用しての炭、薪の生産で生計を維持してきた。しかし小規模農業で地理的条件に恵まれない状況下での生計はなみ大抵ではなかった。そのため最近では、地区から通勤可能な各種会社や官公庁に勤務する人が急激に増加してきた。そうすると家を守る笹川の女達は働き者といわれる程、朝早くから暗くなるまで野良仕事に精を出し、又、農閑期には日雇い労働者として土木工事などの過酷な労働に耐えなければならなかった。しかし1969年(昭和44年)には山村振興事業の一環として、電機器具の部品工場を誘致し、約40人に及ぶ中年令層の女性労働の軽減と収入の安定を図った。その結果、母ちゃん農業とさえ呼ばれた笹川の農業は、棚田にはこびる雑草の力が増すように、じいちゃんばあちゃん農業として転落し、ますます見捨られる傾向を濃くしてきた。又青年層は、背戸の山をかつぐような厳しい山村の生活にひしがれながらも逃れる術を知らなかった両親の期待

を担って、進学はしても地元の高校を卒業したとたん、憧れの都会への就職や大学進学のため散ってゆく。一方村に残った一部の青年達は、「笹川は過酷な労働の待っている村」の印象や、封建性が濃いということで、適令期になっても嫁キキンにおそわれることなどで、心ならずも村を離れ町に仮住居することもあって、何か活気の薄らぐ感じの村になりつつあった。しかし村を愛する気持が強かったり、幸か不幸か家庭の事情で村に留まるようになったわずかの青年達は、村の将来とそこに住む人々の生活の安定による幸せな将来を真剣に考えた理解ある壮老年層や有識者とともに、学習及び活動する中で序々にであるが、伝統に寄生する旧来の悪習とみられるものの除去と脱皮を図り、若い人達にも楽しく住み良い活気ある村に塗り替えてゆこうとしている。村の家々は構造的には強固で積雪に耐え、傾斜地に石垣で土留をした狭い宅地を有効に使うため、作業場も加えることで、間口10間～12間位、床面積約150 $m^2$ に同面積の二階を持った建坪400 $m^2$ 近いものが多く、部屋数は8～10室である。間仕切りは戸やフスマを主とし押入れもない田の字型の間取りとなっている。これは冠婚葬祭を家で行ない、親類縁者の集会など非常に大げさであったことを物語っている。これらについても最近では山村農業の変容に加え、公民館での結婚式などで宴会場を他に求めたり、テーブル式の卓宴が一人一人の赤い塗りの高御膳に代って登場するようになった。最新新築される住宅は、床面積100 $m^2$ 位に押さえて作業場を分離した住いを主とし、押入れ、廊下の配置、部屋の独立等によって、住み易く合理的な家屋構造をとるものが多くなっている。笹川の本流には大正10年に建設された横軸渦巻式発電機を備える最大出力150kWの小さな発電所がある。現在では近くの小川温泉への送電だけ

を行なっているが、第2次大戦後しばらくまでは部落200余戸の電力を供給していた。しかし47年11月に閉鎖された一方公民館活動も盛んで、昭和24年と昭和26年には県、県教育委員会及び読売新聞社からそれぞれモデル公民館として表彰を受けている。現在も教育文化、産業、体育の各部会を通して、社会生活の民主化、文化財の保存、健全な体力づくり等、笹川発展のために活躍している。地区民の心情は、同姓につながる大体60世帯を単位に上流から、<sup>おもて</sup>表、<sup>なか</sup>中、<sup>うら</sup>裏の3つに分かれ、それぞれクラブと称する90～100 $m^2$ の集会場を2つと、2つの共同浴場を運営し、約1000haに及ぶ共有地の維持、用水、道路の共同作業に見られるように、団結心が強くまじめである。反面四方を山で囲まれ、外部との交通も昔からの数本の峠道の他、下流に近い位置に限られたため、接触や交流が極めて少なく若干閉鎖的でもあるが、純朴な気風と暖かい心づかいの残される村である。しかし昨今はマスコミや交通の発達によって交流圏も拡大し、漸次開放的、積極的な性格に変わりつつあるようだ。

外部から笹川に通ずる唯一の自動車道は山腹を貫くトンネルとなっている。





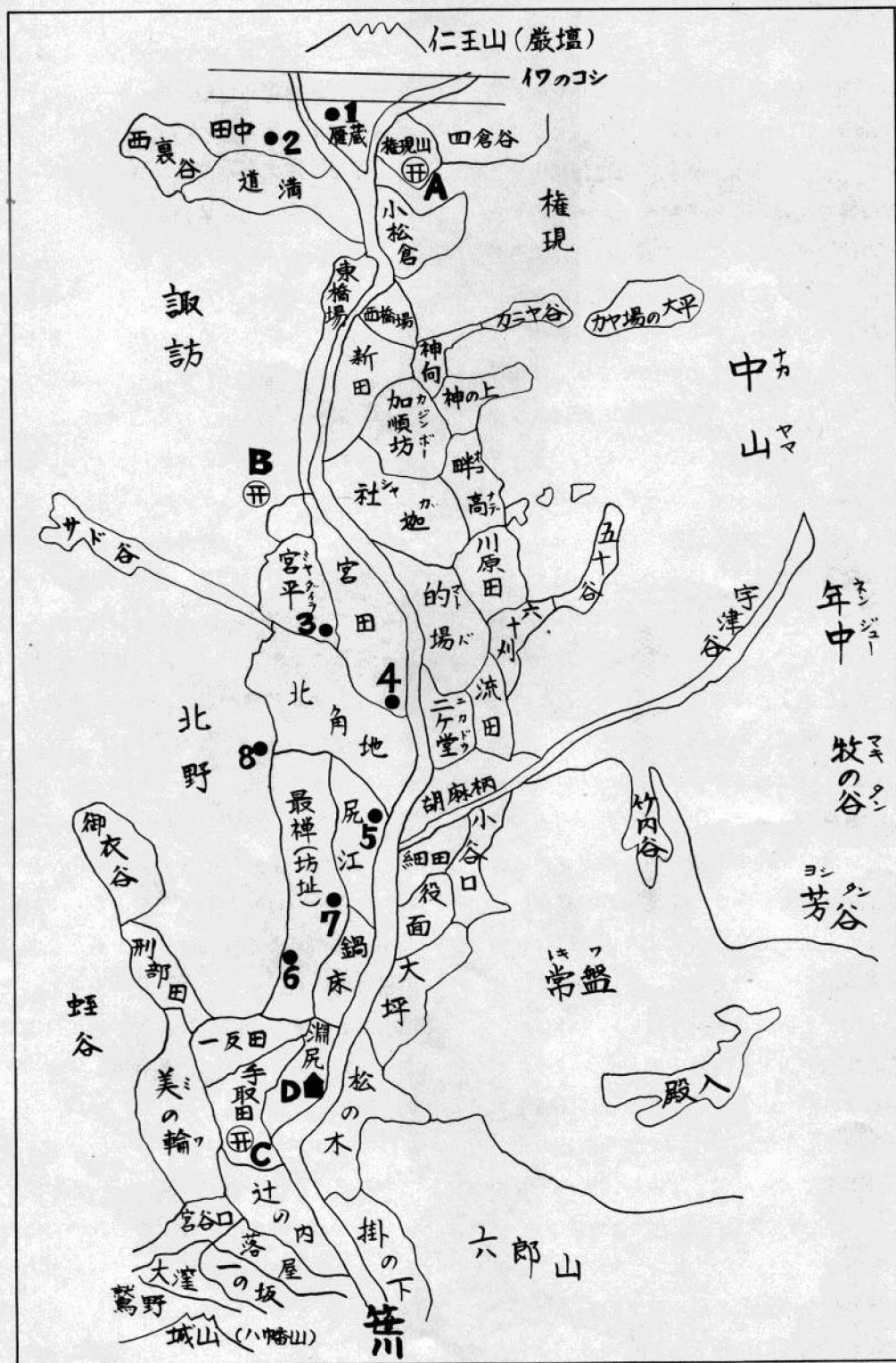
## 第2章 笹川の流れ

今から約20,000年前には北野台地で、また縄文前期中期4000年程前には水坪（三峰）雁蔵道満等の丘陵や、笹川上流の谷頭地で人々が生活していたことを旧石器や縄文式文化に属する土器や新石器の発見によって判明した。当時の人々はその地を選び、主として木の芽の採集や狩猟を行なう狩猟採集経済や原始農耕生活を維持していたものと考えられる。約2000年前程になると日本も弥生町式文化の時代になり、静岡県の登呂に見られるように河川下流の低温地帯か、谷頭の湧水近くで農耕を行っていたことが知られている。しかし本村では現在までのところ、この時代を確実にできる遺物や遺跡の発見もなく不明となる。古墳時代に入ると山を越えた宮崎にはヒスイの玉造りを行なった浜山遺跡の存在を知ることができるが、やはりこの溪谷には当時の生活を示す土器の断片も採集されていないため、その歴史を知る術もない。しかし直線距離にして北東に約2kmの浜山は当時の交通路の多くが海路か陸路でも山裾道を利用している例から笹川地内を経由する古道と推定されるものの存在を知る時、今までに遺物の発見が無くとも人々の生活があり経済文化の面で何らかの影響があったものと考えられる。この頃までに人々の住いは生活のし易い平地に降りはじめ、伝承によれば笹川でも何時の頃か人々はそれぞれ本流と支流の合流する谷口の近くに住居を求め、山を神とし屋敷には地神を祭り同族の集いを定めたようである。例えば古い同族の1つの折谷氏は、笹川の源流に三山並び立つ巖壇を、神の天下る山として、その山体を御山の山として尊び、その裾をほとばしる本流と四倉谷川の合流点である雁蔵がんぞう周辺に居を構え集いあったもの

と伝承される。又、その地点からは滑石製の祭器片や古式の須恵器等の断片が発見され、伝承を裏付けてくれる。この里の下流北野台地の裾にはやはりその地続きの独立峰、諏訪山を神の山とし、尻江地内に地神を持ち、諏訪の神を奉ずる竹内氏が、中流のサド谷口のヒラの腰には城山を八幡の神と信奉し、谷口に地神を守る長井氏がところを構えた。それぞれは水の得やすい谷口に居を構え、周囲でも形姿の美しい山を御神の鎮座する所とあがめ定着するようになった。これら各集落の各氏族は、日頃信奉する神の祭の分れるところから時には対立や斗いもあったが、自然の災いや外部からの侵略に対しては、族長を中心として、機動的に働かし、一丸となっていたと言われ、この同族意識や祭祀の集う風習こそ消えたが、共同作業や共同浴場の維持など共同精神が現代の生活や習慣の中にも生き続けているようだ。平安時代には和名鈔の新川郡佐味（佐比）の一村として畿内の莊園となったらしい。やがてその末期、源平対立の中で木曾義仲が上洛に越後から進撃中、越中東部に勢力を持つ宮崎太郎の本拠となった宮崎城下に軍を留め、ここに北陸の宮を擁して越中西部俱利伽羅の決戦を迎えた。秋の澄みきった日に笹川溪谷周囲の山陵に登れば、西は黒部川扇状地全域を、東は親不知、糸魚川、佐渡のあたりまでの広い展望を持ち、侵入するにも標高100m前後の上り下りの坂を持つ数本の峠道を分け入って来なければならぬ所から、地形的にも戦略上にも大きな利点を有することで宮崎氏の城地となり、北陸の宮の軟禁地として選んだとも何われる。その御所跡は文献からも現在の「辻の内」周辺と見られ、同地の盤直しや付近の開



# 笹川地内・字地名及び五輪塔分布図



番号	1	2	3.8	4	5	6	7
折谷	小林	長井	宇津	竹内	堀内	勝田	
面積	4.5 m <sup>2</sup> (長方形)	1.5 m <sup>2</sup> (円形)	3 m <sup>2</sup> (長方形)	6 m <sup>2</sup> (正方形)	12 m <sup>2</sup> (長方形)	9 m <sup>2</sup> (長方形)	4 m <sup>2</sup> (長方形)
立地	いわ 巖の腰の 崖錐末端に あり	西裏谷口 を左岸に伸 びる崖錐の 末端にある	●佐渡谷口 左岸の尾根 末端にある ●仕切ヶ谷 口の左岸尾 根末端	佐渡谷川 が笹川本流 に合流する 左岸崖上に 位置する。	仕切ヶ谷 川が笹川本 流に落ちこ む右岸崖上 に位置する	北野台地 の西に面す る山裾のテ ラスにある	北角地の 北スミで旧 最禪坊社の 門前近くに ある。
地	字雁蔵	字田中	字宮平 字北野	字宮田	字尻江	字北野	字北角地
特徴	●折谷系の 集落雁蔵平 及び笹川本 流、四谷倉 川を見おろ す位置にあ る。	●杉を回り に植えた小 高い丘にあ り、近くに 大谷川が流 れる。	●小高い丘 にあり、北 側を佐渡谷 川が流れる ●北野台地 の山足で、 最禪坊社の 登山口に位 置する削平 地	●現在は廃 棄され竹ヤ ブとなって いるが、笹 川本流にの ぞみ前面に 宇津谷を見 とうす。	●笹川本流 にのぞみ、 対岸の胡麻 河原を見下 ろす。	●大木の下 にある。 ●堀内系の 屋敷地の背 戸の高台と なる。	●平地(小 高い所)で 近くに小川 がある。
石造遺物	不明	鎌倉 室町	南北朝 室町	不明	鎌倉 室町	不明	室町
●現在なし (小林系に ゆづったと も、権現に おいたとも 流れたとも 伝えられ不 明である)	 五輪塔 (組3ヶ)	●荒神像 (1ヶ) ●五輪塔 (組6ヶ) ●板五輪 (3枚) ●陽刻五輪 板碑(1枚)	●現在なし (寺の墓地 に移した)	●五輪塔 (組3ヶ) ●陽刻五輪 板碑2枚	●五輪塔 地3ヶ 風空2ヶ ●自然形石 塔3ヶ	●五輪塔 (組2ヶ)	
					●地輪の中 心に穴を通 し、納骨す る様式のも もあり		
				●板五輪 (4枚)			

壘時には平安末期から鎌倉期に用いられた土器片や礎石様の岩石などが発見され、現在もなおその地内にある宮の跡をいじって「たたられた」とか、礎石をそのままにして耕作していると縁起が良いとか伝えられている。この頃の類土出土品は「辻の内」ばかりではなく、城山旧登山道の各平担地、宮崎城の大手門社と伝えられる「一の坂」や土屋敷のあった「鷺の平」にも発見されているが、城山周辺ばかりでなく折谷、長井、竹内家の地神近くと小字名に宗教的色彩の濃厚な地内でも盛んに出土している。例えば加順坊、御座、二ヶ堂、最禪、胡麻柄、尻江などで、これらは中世における権現信仰や、諏訪、八幡などとの神仏混合にまつわる遺跡でないかとも見られているが、文献資料の皆無から想像の域を越えず今後の調査と資料の収集と分析研究を要する。ともあれそれらを比較検討してみると中世全期に散見されるものではあるが、内でも比較的古い形式を呈する破片を調べると青海波のタタキ目も荒く胎土にも粗さが伺われ、一応は平安期の様式を踏む須恵器である。特にそれらを主として出土する加順坊の存在はあきらかに笹川左岸の河岸段丘でも平安末期の生活の存在を認めさせることとなる。又、他の地点に於ての出土品を検討してその発達と形成を考えれば、始源は当然のように平安全期から鎌倉初期にかけての活動を認めることとなる。笹川には又この時期における石造遺物がある。それは鎌倉時代に編年され現在朝日町指定文化財となっている田中地内に所在する五輪塔をはじめ、各氏の地神には室町末期に至る五輪塔が数多く残る。すなわち加順坊等における活動の存在が地神のそれと関連することで、当笹川地区内では平安時代から鎌倉、室町と続く古代中世の歴史の存在を示す証拠となろう。また同時代に相当する地神に残された五輪塔や各種の供養塔が

当地区内の宗教的活動の盛んなことや、その建立を可能とした住民の経済・社会地位を物語っている。これは溪谷といった立地条件を生かした農林業収入の他に宮崎城下に所在することで、中世の混沌とした戦乱の時代に、ここを舞台にした戦などへの参加による臨時収入的なものもあったためと考えられる。しかし安土桃山から幕藩時代になると検地や兵農を分離させる目的の刀狩り等も行なわれ、この溪谷の農兵集団も加賀藩から下附された村御印に見られるように、年貢を納めるための道具的農民として身分が確定した。この時から笹川の人の心や生活からは華麗にして自由な活動が取りあげられ、きびしいまでの山村の生活が押しつけられている。人々はこの頃から自分達の生活を守るためには、険しい山肌に挑み、水があれば山の中腹までも開拓をしていったと伝えられる。これは古文書によって江戸時代中頃までに、田畑として開拓できる技術の限度まで開拓が進んでいたことから容易に推定されるのである。またその開拓には多数の人手と時間がかかったので、その際にはそれぞれの同族集団が一体となってお互いに協力して開墾に努めたと言われ、その共同精神と協同の方式の多くが現在の笹川の部落共同体の構造として定着化したものと見られる。以下若手の問題を残す神社関係の記述を除き近世の歴史については、既に刊行された「笹川史稿」及び「宮崎村の歴史と生活」にも詳しいので、それにゆずることとする。

笹川の家々が祀る地神様には、このような五輪塔が数基もある。



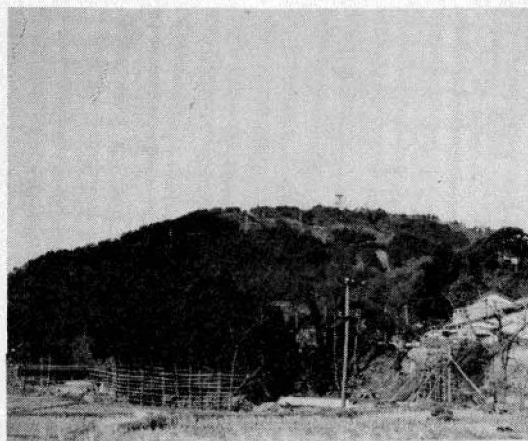


### 第3章 三社成立の幻想

笹川の笹（ササ）は古来「篠」の美称であった。「サ」はまた笹竹を立て注繩を張った形が仮名の「サ」に似るところから、人々はこの神の依り代を「サ」と呼び「サ」を神自体の存在、神のいます所と考えていた。笹川は山の神、権現の神、八幡の神、諏訪の神のいます所である。この「サ」を2字続ける「ササ」は、日本神話の大切な小道具として登場する。古事記等では天照大神が天の岩戸に隠れ給われた時、それを呼び戻そうとする高天原の神々が岩戸の前に集い会議を開かれた。その折に神を招くアトラクションの競演の続くなかで、最高の演技を見せたのが天鈿女命である。彼女のファッションはマサキの枝を冠に、ツタカズラをたすきに掛け、ササを手にし胸も露わに衣のヒモを下腹まで押し下げた開放的なスタイル。手にしたササを打ち振り踊られたその歌は多分「人薨見よ」「稜威燃ゆなな」「弥心足りや」「股乳脛」と宮中秘事口伝に残る歌に似たものと言われる。即ちこの折の「ササ」は明らかに神の招き代であった。又ことばとしての「ササ」も神楽等のはやしや神酒の別称とし盛んに使われたもので、笹川の「サ」も、それに重なる「ササ」も古代から神々のつながり神の符号でもあった。川は又、天の恵みである雨が神の山の体内を浸み通りその裾から湧き出すもので、聖なる神の霊であり力であった。笹川は山の里であり、谷川のせせらぎの高い村である。その村のあたりを平野から見ると、遠くに霧のかかりやすい神の山を望み、近くで仰ぐ平地の村から見たその裾の村は、「篠郷」であり流れる川は「篠河」と呼ばれていたようだが、古くは宮崎に包含されていたものであろう。従ってその成立を文献上から見

る時、寛文10年（1670年）の村御印の中に笹川村となっているのが最も古い。このように春はかすみ夏は霧に隠れ、冬は雪の訪ずれの早い「ササ・カワ」は、古くから神の里だったのかも知れない。しかしその「ササ」の「カワ」に生を受け笹川溪谷に住む人々はまたそれなりにこの地をどう考えていたのだろうか。現在もまだ残る伝承や習慣の中からその信仰の根元と、それを維持した氏族の関係伝承の系譜などを調べて見よう。飛驒山脈の後立山連峰が北に伸びて海に没するところは両越国境の海岸となり、越中宮崎、頸城親不知、子不知と西の黒部扇状地と異なり、断崖の裾に日本海の荒波が砕ける険しいところとなる。古代から多くの道は、海岸回廊の危険をさげ或る時には見晴らしのよい丘陵や、時には高い山を超えるため尾根道をたどることが多かった。山の峠では旅の無事を祈って祭の場（長野県御坂峠・碓氷峠等）を設け、谷のささやかな流れでは、携えてきた食糧を口にして夜明けを待った。越中平野の東端を緑の壁で仕切る黒菱山とその尾根が重なり、北端に城山

長井氏の崇敬した八幡神の鎮もる城山は木曾義仲の築城以来、国境の要崖となった。



(248 m) 地塊がそびえたち、東西交流の社会的文化活動を阻害してきたし、西方の文化が吹きだまり、東西文化の西への窓口となった。笹川は黒菱と城山が連なる山陵に4周を囲まれ、海岸から南東に約2kmも分け入る山合いの小さな盆地の村である。この村へ入るには、笹川を囲む出々の幾つかの鞍部を越えるか、川沿いにつけられたヘツリの断崖を通る一本の曲りくねった道をたどるかである。藩政時代でも貢納道はみな、峠やヘツリのような険しい坂だ。江戸末期に入善町の吉原から折谷孫右エ門に興入した花嫁は、馬の背に揺られ、シャンシャンと鈴の音を響かせながら村に入る峠を下ったと言うし、明治の頃魚津の町から寺に迎えられた御新造も、乗ってきた人力車が元屋敷で街道をはずれ、川沿いの細い道をたどりはじめると、狭間なす溪谷、兩岸の山や、行手を閉ざす急崖の壁が迫って胸をおしつぶされ「この奥に本当に人の住家があるのでしょうか」と声を震わせて問いかけ、応えも聞かず眼を閉じられると化粧した白い頬に一筋の涙が流れたと語られている。ここ笹川は近世になると海岸を主とする通りが北陸道から外れたように、古代から中世にかけ活躍した文化の中継地からも外れ、いつか山合いの秘境「ササゴ」に変わって来たものであろう。ここ笹川には竹内、長井、折谷の三氏がそれぞれ古くから清浄な山を御神体とする氏神を持っていた。竹内氏は村の東にある諏訪の山(現社地「宮平」に接する山)に諏訪大明神を祀り、祭事を宮平で行っていた。長井氏は北にそびえる八幡山(現県定公園城山)に正八幡を祀り、それを仰ぎ見る宮の陰(現「手取田」「辻の内」)に社殿を造って祭を行っていた。折谷氏は十二様の山神を南東に立つ「巖岳」に祀っていたが、権現を習合すると、権現山頂に祠を建て、祭場を巖座(現・雁蔵)一帯に置いた。

現在43戸を数える竹内氏の祀る諏訪大明神は、御祭神を建御名方神とする信濃の諏訪大明神につながる社で、例祭を8月27日とする。古事記等の神話によれば御祭神は、越の奴奈河媛を母に、それをはるばると求めて妻問いした出雲の大国主を父とする。いわゆる越と出雲系を統合した神で、ヤマト朝廷の威力にも簡単に屈しなかった。今の笹川人の性格のようだ。この神は古来、狩猟の徳も著しかったが、中世には武神として名高くなったものである。諏訪神の信仰は石に頼るものと言われ、長野県の諏訪湖をめぐる諏訪大明神の上社、本宮でも神殿は持たず、丘を御神体とする形である。(大場磐雄、宮地直一氏の研究から)笹川との結びつきは笹川溪谷の下流、裏むきの北野山麓に竹内氏が住むようになってからであろう。竹内氏は橘氏の末と称し、京の都では従五位の亮の職にあったが、藤原氏の隆盛によって追われ、笹川に下って落着いたものと言われる。今も家紋には橘紋を用いている。この竹内氏には後に三河源氏の流れをくむと伝える別流があつて桔梗紋を使っている。笹川の諏訪神も古くは社殿を持たなかったことで、古形式に近いが、笹川の祭祀の中心的な柱となったので、平安末期の寿永年間以降の

竹内氏の一族が鎮祭した諏訪大明神の降臨する諏訪山  
この山を背に現在の諏訪神社がある。





ことと推察される。即ち寿永2年(1183年)のことである。源義仲は幼時から育成してくれた木曾の住人中原兼遠の応援によって、不足する兵馬と経済力を求めた。幸いに木曾に近い諏訪盆地で当時信濃武士の精神的支柱であった諏訪神社の神氏を味方に、高原で牧場等を経営する信濃源氏の支援を受け、信濃から越後を経て越中宮崎城下に軍を進めることができた。その軍には諏訪信仰の核と言える下社の大祝(神の現身)金刺盛澄等も加わっていた。宮崎には越中東部に勢力を張る宮崎氏があって、ここに以仁王の御子、北陸の宮が先年より陰栖していた。その御所は宮崎の南方山にあった三郎屋敷をそれにあてたと後の記録は語るが、当時笹川の地名が世になかったことから、宮崎の南の山は、方位と位置からして当然「篠河地内」にあたることを示唆しているし、それに比定される遺跡も存在する。寿永2年(1183年)義仲は、上洛後の8月宮中での皇位継承の儀に際し、この宮崎に隠れる「北陸の宮」推載を強く主張した。義仲にとって北陸の宮の存在は、天下を支配する道をたどるための切り札にもなっていた。従ってその身柄の警備は嚴重を極めることは当然でその任を果すものも、宮崎一党の三郎はもちろん、信じて加えるに信濃武士や諏訪社の神氏があたったものと見られる。その居館址は宮谷口の北、「辻の内」に接した「美の輪」に見られる。神氏は古来三輪を称えることで諏訪神社の祭事に関しては、その神氏たちの格別に厳しい奉仕が伝えられる。例えば先に掲げた大祝金刺盛澄は、8月27日から5日間にわたって、諏訪盆地をめぐる高原の一角で行なわれる年1度の大祭事、諏訪上・下社の御射山祭の司祭のため、砺波の合戦で平家の大軍を打ち払い旭日昇天、破竹の勢いで都をめざす義仲の軍勢を離れ、越中から神の待つ諏訪に引き帰って奉仕している。宮崎城下に残

巖座にあった折谷氏の氏神十二社神が、権現神と習合して、十二社権現となり、この権現山で鎮祭されていた。



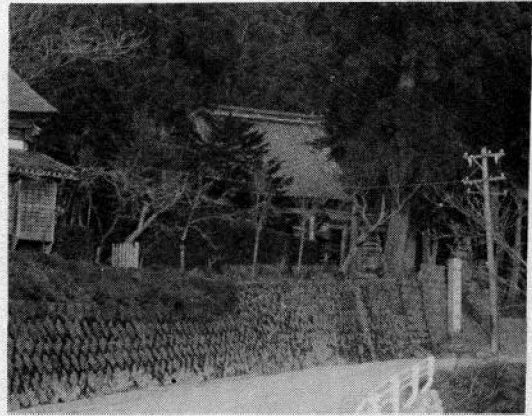
された信濃武士もまた遠くに離れた北国にあっても諏訪神社の祭祀を執行したことであろう。今北陸の宮滞在を確実にするため、義仲越中入りの5月から「玉葉」等に伝える寿永2年9月初旬頃までの4ヶ月と最少限に見ても、その間に行なわれる諏訪神社の祭事には5月2日の上社、押立御狩の神事、6月27日の上社御狩神事6月30日の下社御田植の神事、8月1日には御船祭、8月27日には上社、下社による御射山祭事、武士や生産に関する重要な祭事が数多く執行されることになっている。諏訪での神に対する諏訪神氏とその一党の真摯な奉仕の姿勢は、鎌倉幕府に認められ、木曾義仲敗死後もそれに加担した罪は許されることとなり、追討とは別として諏訪神及びその神祭事の執行は、後々まで変りない被護を得ることとなった。笹川の諏訪氏及びその関係者でも同様と見てよからう。溪谷におけるこれらの神祭事も形としては消滅してしまったが、野の地形や地名に在りし日の華麗な絵巻を偲ばせるかのように残されている。例えば諏訪神社対岸の正面にある豪族の砦か、御座の跡、その背後に続く山中の「狩矢場」のオオダイラ、マキ、タニの平の巻狩の跡。笹川溪谷第1の平原で繰り展げられたであろう流鏝馬等の



祭事的な競技場跡「オコナデ」「<sup>シヤケ</sup>社家」「<sup>アトバ</sup>的場」。御田植の神氏跡と伝えられる社地の北に続く「宮田」等、後に諏訪神社が笹川の氏神三社の首座となったのは、その祭を長く維持した竹内氏や、堀の内て奉仕した堀内、深松党の信濃武士の参加による諏訪神勢の増大による裏付けがあったからとも言えよう。従がって現在も続けられているこの例祭は諏訪の神氏たちが残した最後の神事、御射山祭の名残りで見られ、祭の終わった後で襲う二百十日、二百二十日の台風鎮圧への祈りをこめ、氏神・諏訪神に<sup>ニエ</sup>を調達するための祭と言われるが、今はその神祭事の形もない。ただ8月26日の朝、村人たちが夏の熱気を受けて、ぐんぐん伸びた篠竹の若葉を求めて奥山へ分け入り、一枚一枚ていねいに摘みとってササ川の清浄な流れで汚れを落とし、つきたての白いモチを包んで、<sup>ニエ</sup>の代りに神前に供える習慣に昔日の祭を偲ぶより他にない。

長井氏の祀る八幡神は、日本の神社の内でも最も普及していると言われているが、笹川のそれは御神体を海に最も近く、山頂からはるかに能登を望む南向きに聳える城山にしていたこと、例祭を3月12日にあてている伝承や神号を正八幡ときていること等からこの神の祖形は多分に、九州鹿児島の大隅正八幡の伝承の如く大比留女とその幼ない王子祭神とする聖母神子<sup>ハハコガミ</sup>の母子神と見られ、その伝承を生命とする巫女神人集団の活動による伝播を長井氏が一門の氏神としたものであろう。しかしこの神はあくまでも八幡神の偉大な神格の支配下におかれることを前提として、激しく崇る霊を神として齋いこめたものと言われる。これにまた長井氏の先祖も都にあって左エ門尉をつとめ、故あって笹川に住み、左殿と呼ばれ背後の谷を「サドの谷」と言う伝承が加わり、其の神との結合に興味ある問題を提供する。又サド谷口に近い長井氏の地神には

諏訪山麓宇宮平に鎮祭される三氏神の合殿、現諏訪神社の森



右手に鎌を左手に玉を奉げる石像を安置して若宮（荒神）とするなど、この推測の可能性を強く感じる。しかも現在の正八幡は先の信仰も含め、寿永の昔北陸の宮滞在地にあって信奉されたと伝えられている。宮のかけ（手取田）のお宮で最近まであった正八幡社の祭の祭祀を継承することによって、平安末期に僧行教の手によって姿を現わして京城の鎮護となった石清水八宮の御祭神菅田別尊を主神とする神社とし変遷してきたものである。長井氏の先祖、左衛門尉も、その末も明らかではないが、今日の長井家の宗家は左衛門の「宗」「三郎」と称し、今も村の中央「サド谷口」に居を構え八幡神を祀る等から、あるいは北陸の宮を警護した宮崎の三郎の末が現在剣酢漿草の定家紋を守る長井氏でないかと幻想し、祭礼の折に若者がかつぐ神樂が、前後、左右、上下に激しくゆり動かされて渡御させる形に、長井氏の祖霊神を祀る祈りの声を聞くような気がする。

木瓜紋を用いる折谷氏の始源は、まさに笹川の歴史のはじまりと考えてよいだろう。折谷氏の祀る十二社権現は柳田国男の指摘した氏神祭の月にあてる2月、しかも9日に行なわれることや、「13人の炭焼衆が寝宿りする山小屋で雉

の化身であった美女に、年寄り1人を除く12人の若衆が舌を抜かれて取り殺された」という「十二組の坂」の伝説や、残る各種の伝承かやも、十二社の御祭神は12という数字を忌む山の神様と考えられる。殊に権現山に神を祀る以前は、笹川の正面に三山並んで聳える仁王山(780m)を巖壇(御神体)とし、中腹を巖の腰、裾の笹川本流と神の降臨道、支流四倉谷の合流点に開けた谷頭原に巖座(現雁蔵)の祭場を持つなど、山の神の来降臨を象徴する形式を持っていることや、宗家を中心とする祭の折の静かな響応の伝承はそれを裏づけてくれる。この様な山神信仰に、平安末期全国的に拡散布教された「仏菩薩が人身などの姿に権化して衆生を済度する」という山岳宗教に仏教が習合して成立した権現信仰が加わり、ここに十二社権現の成立を見たものと考察される。その系譜は中世末期における京都八ツ橋、聖護院の門跡准后が北国巡行の文明18年(1487年)7月、供人200位と宮崎城下に泊ったことから推測し、天台宗教を旨とし聖護院に根拠を置き、中央根本道場を熊野山、大峰山に持つ熊野系の山岳崇拜の修験者集団、すなわち山伏の本山派に属するもので、東北の同系羽黒山との中間的存在として把えることができそうだ。十二社権現が成立すると折谷一門の古い葬地で、

安政5年江戸大久保の人によって喜納された、諏訪神社の二の鳥居



姿もよく近く仰ぎ見ることのできる権現山頂に祠を造り、祭を伝承したものであろう。現在諏訪神社で行なう獅子舞の祖形は神が獅子の姿を借りて悪魔を払う東北系に属するもので、平安時代の末期に山伏によって伝わった神事芸能の一部が、北陸一般の傾向と異なり、原形に大神楽を加えながら数百年を経た今日もなお舞いつがれているものであろう。以上三社の成立についての考察を幻想的に綴って見たが、ここで三社の統合についての考えをまとめてみよう。

普通氏神と言われる同族神の祭祀は、氏人によってのみ行なわれることをたて前提としているが、竹内氏の氏神に堀内、深松氏が加わり、折谷氏の氏神に小林、宇津の両氏が加わると、同族団は一つの神を媒体とした擬制的な同族集団としての気分が強くなり、分家、婚姻等も行なわれると、中世末期までには、ほぼ血縁的な同族関係の単位よりも、住居地の「おもて」の折谷、小林、宇津は十二社権現を、「うら」は竹内、堀内、深松の諏訪社を、「なか」は長井、勝田の八幡宮と、地縁的集団の祭祀に移行し、古い形の同族団の祭祀圏は崩れはじめたものと見られる。そこへ近世初頭に行なわれた幕藩体制の権力による浸透である。すなわち、山間の地形に制約され木呂切り、馬の飼育、水田耕作、戦乱の続く中世で東西争奪の焦点となった宮崎城下で、一門が氏神に結束して機動的な活躍をする、農兵集団の部落。ある程度まで自給自足も可能であれば真実に近い形に信ずる先祖の高貴と、その未畜の誇り高い衿持を有する特殊構造を徹底的に破壊しつくし、農民として土地に定着させる政策の強行である。それに反抗する時には、柳田国男等の指すごとく、多くの山村が蒙ったような内部対立による主導権争いの混乱、誘発、強権の圧迫や、大規模な殺戮の行なわれた可能性も、江戸初期以前の文献資料の皆無から考え



てみる必要がありそうだ。だが笹川に於いてこの混乱を起さず收拾を容易にした施策は、氏神に結集する血と集団の誇りを満足させながら精神的支柱を排除するとか、それに勝る体制的な精神支配を可能とするものの提供が考えられる。その役割の一端を担ったと考えるものに、幕藩の初期の新宗教の布教がある。すなわち宮崎城主・小塚権太輔の剃髪によって創建されたものと由緒に伝える真宗東派の正覚寺の出現である。これは宮崎城主と言う格で村人を引きつけ、寺に神鏡を置かせることで、仏主神従による氏神祭祀の形骸化の行なわれた形跡が認められる。言うなれば、笹川の在地武士団の誇りを認めつつも、同族的集団の結集の核を取りあげ、体制化を進めた政策で、二元的目的の達成を計ったものとも考えられる。仏教による精神支配成功の時点では、氏神の合祀もさほど問題にならず、その祭祀者もまた一氏一門に限らず、地縁的集団の信を集める人と家であれば、制限を受けるものではない。従って三社の合祀は少なくとも江戸時代の初期を想定することができ、ここにその祭祀者として神を祀る座であった雁蔵から、

権現山の裾で神むかひの尾根先を切り開いて居を移した折谷六郎兵衛の先祖と、神の近くにおいて奉仕する役割を任せられたものとして、現在もなお諏訪神社に接して屋敷を持ち、数百年の家系を伝承し記録する折谷系の出・折谷孫右エ門家の存在が納得されてくる。同家は当時でも名望家であったものであろう。これはまた合祀にしても社殿の建築にしても、過年の「笹川史稿」「宮崎村の歴史と生活」に述べられた「慶応の頃（1865年）改築……………」の記事は、その存在を無視された寛政11年（1799年）8月26日遷宮にかかわる一村の肝煎達村役人の連名による「社殿再建」の棟札があることで完全に誤りが正されるし、再建の文字によってその合祀を、それ以前に行なわれていたことが明らかになり、前述の推定により真実性を持たせるものである。なお笹川の各氏は江戸時代に入って農民及び一般から姓が取りあげられると、公用の文書にこそ姓を用いなかったが、村内に於ける私用の場合は当然のように姓を称し、その誇を守り続けている。これもまた、一般の農山村と異なる特色である。

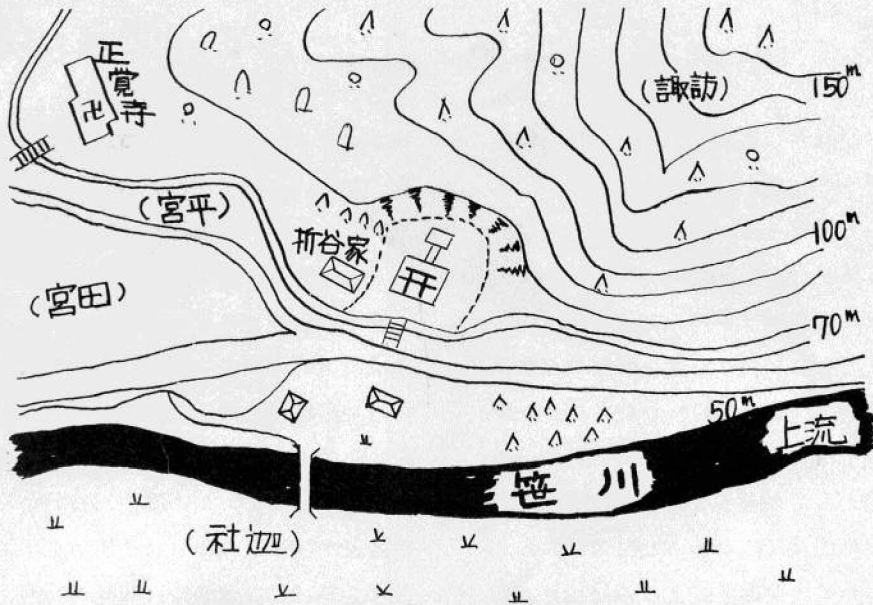
## 第4章 諏訪神社のあたり

現在の諏訪社殿は笹川のほぼ中央部に位する宮平に置かれ、樹令400年近い、杉の木立の中に静もる、宮平では古くから神宿る山とあがめられる神奈備の姿形諏訪山を背にし、笹川の流れと溪谷最大の平地を見わたせるえぐられた断崖の上に鎮座する。眼下にひろがる対岸の山足や、平地には神向い、的場、神の上などの地名が存在することより、おそらく当社の神祭事の場とされていたと思われる。又、この宮平には諏訪社と直線距離にして北西約100mのところ

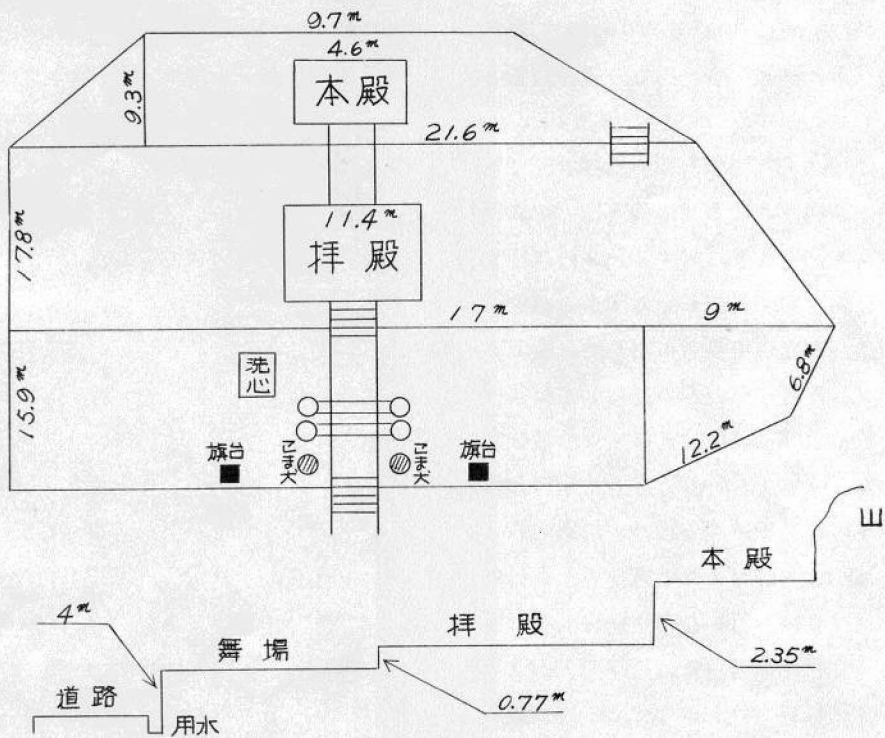
に正覚寺があり、この2つで諏訪山ろくを占めている。江戸時代の仏主神従となった笹川の神仏混合の形態を今に残すもので、明治初年まで諏訪社の神鏡は祭礼日以外は正覚寺に保管されていたと伝えられる。しかし諏訪山麓の旧社地の礎石及び、現社地の占有では、礼拝及び山容の条件から、社地の選定が正覚の建立に優先したものと見ることが出来る。従って当初は神主仏従のものと考えられる。



# 諏訪神社周辺図



# 諏訪神社



# 第5章 まつり

## 5-1 祭の伝承………古老の聞書から

諏訪神社の祭礼及びその維持は、一村一体の行事として運営されてきた。古老達の語る伝承では、古くから神招きは、神主と村役人及び有資格者によって執行され、祭のクライマックスをつくる様々の神祭事は若衆である青年達の手によだねられてきたという。翌年の祭の役割は前年の暮に決定される。秋の祭も終り忙しい稲刈後の農閑期を待って出稼ぎに出てた若衆達が、正月を村で迎えるため大きな荷物を肩に帰ってくる頃、溪谷の山々は降り始めた白雪におおわれる。殆んど若衆が顔を揃えるのは12月26日、この日は朝から15才より25才の年で組織する若連中の総会が開かれる。会議は表・中・裏の若衆宿を取りしめる20才過ぎの幹部若衆によって進められる。経過や会計の締くくりの報告、新年度の役員や行事計画等、事務的な会議が終ると短い冬の日も暮れかかり、やがて「風紀の反省」となる。そこでは一年間の若衆の出稼ぎ先や家庭での行動が話題とされる。出稼ぎ先での非行、恋愛、勤労状況、年長者に対する朝晩の挨拶や、身の回りの世話などが幹部若衆の間から話題に提供され、生活態度の優良者に対しては褒賞のこぼしを、又、極端に悪いものに対しては集団リンチや、時には「若連中除名」という最強の処罰もあった。すべてが終ると各若衆宿の頭達によって翌年の祭を維持する役割が決められる。方法としては15才～17才までの若連中を全員起立させ、体格や日頃の行動などを総合的に判断して、15才及び16才の若者には笹持ち、17才の若者のうち特に長男だけを選んで表、中、裏各1組と、全体で4組の舞子を決めた。又、残った

18～25才までの若連中には、祭の際の神楽かつき、たかはり持ち、笛吹き、太鼓タタキなどの役割が与えられ、太鼓持ちにはその年他村から婿入りした若者が選ばれることも多かった。

舞子に決まった家では正月早々新わらを神前に供え、庭土間の隅に伏せられた土場石でこの新わらを打ち、獅子天狗のわらじを編んで奉納の日を待った。冬の間舞子たちは、若衆宿で毎日毎晩のように、夏は祭の23日前から学校で毎晩練習が続けられていた。明治末年頃までの祭礼は3月12日の春祭には神社の境内で、又、8月27日の秋祭には神社と各家を回っていた。普通秋祭は8月27日の朝、諏訪神社の境内で神前の獅子舞（悪魔払いの舞と天舞）を終え、神楽を先頭に村の中に向けて御神幸が行なわれた。順序としては、まず大寺（正覚寺）次に小寺（林泉寺）で舞い、その後、当時笹川が一番下流にあった裏むきの一反田まで直行し、一反田（竹

秋祭を前にひとつひとつの動作や形にまで、きびしい声が飛ぶ練習風景





内家)より若連中の組み合わせた一定のコースに従って各家へ立ちより、一庭毎に舞を奉納しながら上流へ向った。細く曲りくねった道を行く神楽を先頭にした一行の前後には、美しく着飾った多くの子供達が奉納される家で配られる食物を楽しみに群がって歩き、一緒になって祭礼を盛りあげていた。一日目の27日は「裏むき」を終えて「中むき」に入り、たいていは「忠平どん」もしくは「利助どん」附近で暗くなる。暗くなったところで一日目の舞を終える。そして舞納めの家を御旅所として神楽を屋内に安置し、太鼓、面などの道具も預けて各自家へ帰り、夕食後は8時頃から神社の境内で始まるにがた荷方節、しかた仕方節などの盆踊りに熱中した。翌28日は前日に引き続いて「中むき」から「神むき」にわたって各家を回り、上流の一番止めは表むきの「雁藏家」であった。ここでは前庭に造られた仮舞台の上で薄暗くなるまで武技舞や今様芸居を演じた。やがて長い夏の日も山の端から光を奪い、谷々に暁暗が立ちこめると舞を納め神幸の行列を組む。その場に神楽、獅子、天狗、村役と続く。行列は急崖の山腹を削り取って開かれた長ホリの細い道を、静かに降りて諏訪社に渡御する。まさに祭のファイナーレを飾るにふさわしい美しい光景だったと言う。行列は一旦諏訪社の前を通りぬけ、奉仕する家柄として最後に残された折谷孫右工門の石段を昇る。そこは前にも増した盛況さで、前庭に造られた仮舞台の回りは村中の人達で埋まり、神々とお別れする最終の芸能を演じ、村中こぞってにぎやかな宴が行なわれる。だがそれもつきぬまに、神楽は社に帰られて総てが終る。祭はあと昨晚に続いて境内で行なう盆踊りだけとなり、その夜は明



竹内与松

昭和46年

5月23日 逝去

け方まで踊り回り、山と空の色が塗りわけられる頃ようやく盆踊りに疲れた人を前にした、音頭おんどとり一人一人による千秋楽の物語りも終る。各家で演ずるものは、その家の地位によって差があった。つまり一般の家は獅子だけによる悪魔払い、次の組合頭や村役の有資格者の家では獅子に天狗のからむ天舞が加えられ、長百姓の惣代格では仮舞台が設けられて、2つの獅子舞、若衆踊、武技舞、歌舞伎風の道化や芸居までが演じられていた。神楽の訪れた各家では、家の座敷や広縁など家中開けはなち、酒、料理のもてなしをし、「ハナ」と呼ばれる祝い金を包み、神楽台の下に設けられた窓に投げ入れ奉納金とした。この奉納金は当時の若連中の重要な財源であったと言われている。しかし昭和44年と同様な大正元年の大水害で多大の損害をこうむった笹川では、その後災害の復旧に追われ、大正8年までは祭礼の獅子舞でさえ行なう気持になれず、神事だけで済ませていたようだが、村人からの強い声で大正9年から再開されるようになった。しかしこの時から金銭的な負担の少ないようにとの気づかいで、諏訪神社の境内だけで獅子舞を行なう近年の形式へと変遷して行った。だが形は変わっても祭と村人との連がりは深く、それはよい祭と言われる8月26日の朝から始まる。村中から各家一人が神社の境内に集まり、落葉等で汚れている境内や社殿、拝殿を丹念に掃除して「しめ縄」をぬい直し、端に杉の葉をさした杉丸太の招き代(15m)3本に諏訪大明神、十二社権現、正八幡とそれぞれ神旗を掲げ、神や人々に祭礼の行なわれる場所を知らせる目印にした。昔は26日の夜も更けて神迎えに先立って、宮平みやひらの前を流れる



長井宝得

念に掃除して「しめ縄」をぬい直し、端に杉の葉をさした杉丸太の招き代(15m)3本に諏訪大明神、十二社権現、正八幡とそれぞれ神旗を掲げ、神や人々に祭礼の行なわれる場所を知らせる目印にした。昔は26日の夜も更けて神迎えに先立って、宮平の前を流れる

笹川本流のシヤガで神楽をかつぐ若者たちのみ<sup>××</sup>そぎが行なわれた。諏訪の山頂を仰ぎ見る位置<sup>××××</sup>にある元宮から、村の有志、宮惣代、若衆頭や幹部等、祭事の責任者が総員45～46名で、祭の主となる神の御霊代を神楽に招き、暗い杉木立の山道をタカハリやチョウチンを先頭にし、ササの葉で露払いをしながら祭礼の場となる宮の平の広場へお連れしたと言うが、昨今ではその姿も消え27日の午後拝殿で神迎えを済ませる。

往時をしのばせるのは夜になって拝殿から下の広場までの石段を、激しい練りで御祭幸させる神楽の渡御と、笛、太鼓に合わせた悪魔払いの舞、熱気と活気をかもす天舞を行なうことに止まる。28日の夜はいよいよ祭を終えることで、神の御霊代も拝殿での御祈りを最後に山の彼方へ帰られる。29日の朝は神旗の収納や境内の清掃が行なわれることになっている。

## 5 - 2 祭の昼と夜

### 春 祭

笹川における春祭は農業の作業に合わせたように進められてきた。以前は3月12日を春祭の日とし、それが終るとジャガイモを植える準備をする。今は4月15日を祭礼とするので早場米地帯の村では、苗代を終え一段落して春祭を迎えるのである。15日の昼はいままでの仕事の疲れをいやすために、たいていは近くの小川温泉や自宅で一日をゆったりと過ごし、晩は早目に

御神酒をいただき団らんの夕飯を済ませると、家族揃って諏訪神社の境内へ獅子舞を見に行く。だが農繁期中のことでもあり、明日の仕事が気になるのか獅子舞が終ると、若者の踊りも見ずに早々にひきあげて行く人も多い。このため最近では、戦前に執行されていた、3月12日に祭礼日をもどしたいと言う、人々もあらわれはじめた。

### 秋 祭

「笹川の祭」と言えば、8月の終りを飾る秋祭が代表されている。8月25日から26日にかけて村の中では、真黒に日焼けした男衆が出稼ぎ先から、ミヤゲのどっさり入ったポストンやリユックをかついで帰ってきたり、都会から帰省する息子や娘を、又、新たに一族に加わる娘婿を迎える親達の嬉しそうな笑顔が見られる。この時期は村の人口が一年の内で最もふくらむのである。一方子供達はあちこちで、ミヤゲものの

十二社権現、八幡神、諏訪大明神の神旗を掲げ、幔幕をめくらして祭礼を待つ社殿。





笹の葉で清められながら、荒々しくおくられる  
神輿の渡御。



見せ合いをしたり、又、昼過ぎから自分の欲しかったものを買ってもらうため、家に落着いた父親などと一緒に町へ急ぐ姿も多く見受けられる。長い間家を守っていた女達は、26日は早朝から葉の広いササを求めて山奥へ入り、深緑に伸びたササの葉を採ってくる。これを笹川の清流で洗い浄めたくさんの「ササ餅」をつくる。残暑の頃であってもササにくるんだ餅は日持ちが長く、他村の人にも喜ばれるが、つきたての御初穂は神棚に供え、残りは出稼ぎから帰郷する夫や嫁いだ娘、又遠い都会に就職し秋祭を楽しむにわざわざ帰ってくる息子や娘、他村からの来客者などに、笹川の心として味わってもらうこととなる。26日晚の踊り疲れで、27日は仕事も休み、午前中は静かである。昼すぎからは買物をする人々や、近くの温泉でのんびりする人、又、一年或いは数年間の思い出話などを語り合う同級会が村の家々で開かれそれに参加する人達などの往来で騒しくなる。夕方は夏の日のまだ明るい7時頃までに、夕食や風呂をすませ、タンスの奥にしまいこんであった着物をひきだして着飾り、呼せ笛に引かれるかのように家族が揃って神社へ向う。獅子舞を見る眼は真剣だが、獅子舞が終り村の青年達が中心となっ

て踊りがはじまると、自らも一緒になって踊る。境内の踊りの輪の内側には、ゴザ、ムシロを敷いてそこに座りながら踊りを見物する村人達の姿は、笹川独特のムードで、昔は婿選び、嫁選びのためにこの場が大いに利用されたと言われる。踊りは12時前後に終る。これは26日～29日まで毎晩続けられ、他村からも毎日たくさんの若者達が集まりいやが上にも盛上げさせる。最近では29日には、仮装盆踊りの大会も開かれる。夜遅くまで踊っているため、27日～30日までの午前中は本当に静かな部落となる。この秋祭が終ると二百十日、二百二十日が目の前である。春から手塩にかけた稲田には黄色に色づく稲穂が深く首を垂れ、収穫を待っている。嵐もなくこの実りを手にする喜びを持つか、風雨にたたられて一年間を無駄にするかが、この諏訪神社の祭事にかけている。虫のすだく声も高い8月の終り、山深い笹川の里で連夜にわたって行なわれる異常なまでにぎやかな高まりを見る祭と踊りは、一年の幸福や無事の願いがこめられているもので、楽しい思い出の去りゆく夏を惜しむ夏山の閉山式でもなければ、意味薄い芸能会とは質も異なり、実りを司さどる神への限りない歓待と、悪霊を慰撫し、払い出す祈りの乱舞である。

からむ天狗を慰撫して舞う獅子。



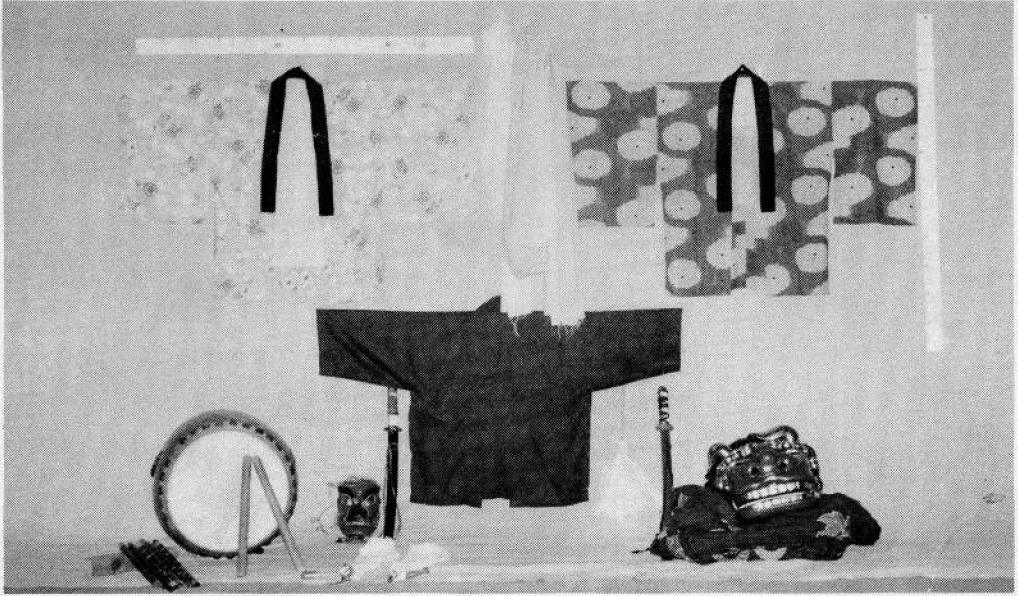
# 第6章 獅子舞

## 6-1 装いと採り物

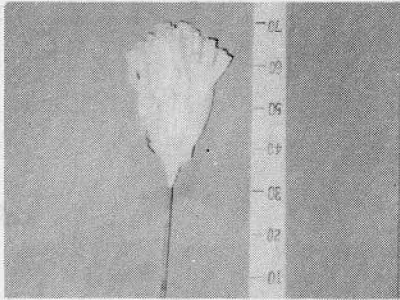
		獅子	天狗
悪魔 私 い	採り物	<ul style="list-style-type: none"> <li>●刀1本（全長45cm、刃わたり27cm）</li> <li>●へい1本（全長45cm・篠竹柄）</li> <li>●獅子頭</li> </ul>	登 場 せ ず
	身体	<ul style="list-style-type: none"> <li>●赤地に菊の花を染めぬいた着物を着る</li> <li>●角帯をしめる</li> <li>●黒いモモひきをはく</li> <li>●黒いタビをはく</li> <li>●黒ヒモワラジをはく</li> </ul>	
	手	●鈴3ヶをつけた白い手甲（肩でとめるため上部を筒にしたもので約30cm）をつけ、赤ヒモでしばる	
天 舞	採り物	<ul style="list-style-type: none"> <li>●刀1本（全長55cm、刃わたり37cm）</li> <li>●獅子頭</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●刀1本（全長45cm、刃わたり27cm）</li> <li>●天狗面</li> </ul>
	身体	悪 魔 私 い と 同 じ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●赤地にまりを染めぬいた着物を着る</li> <li>●角帯をしめる</li> <li>●白いももひきをはく</li> <li>●白いタビをはく</li> <li>●白ヒモワラジをはく</li> <li>●青・桃のタスキ（全長5m）をかける</li> </ul>
	手		●鈴（大きく音色のよい5ヶ）をつけた白い手甲（肩で止めるため、上部を筒にしたもので約60cm）をつけ、赤ヒモでしばる
記事	獅子の後に全身を黒い衣しょうでまとった補助の男子（尾もち）がつく		



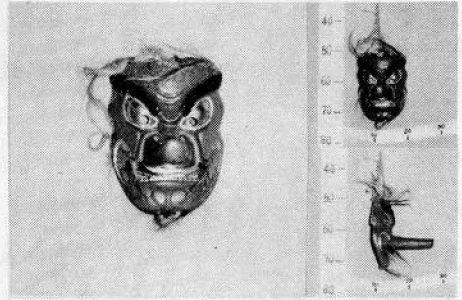
衣掌一式



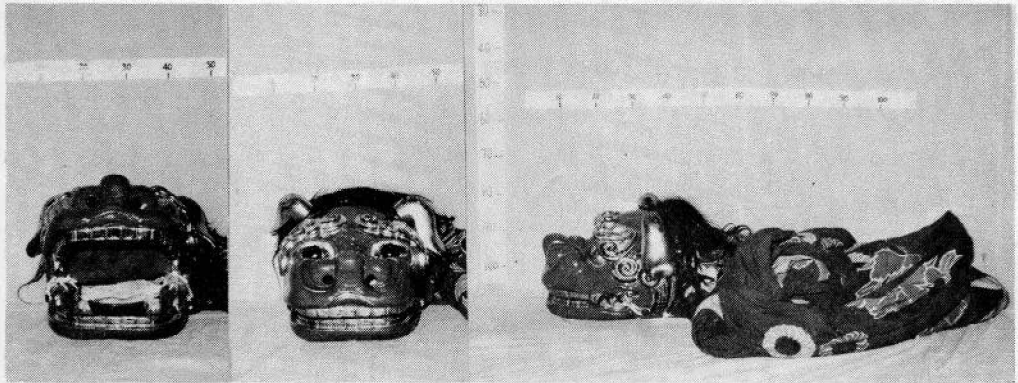
ヘイ



天狗の面

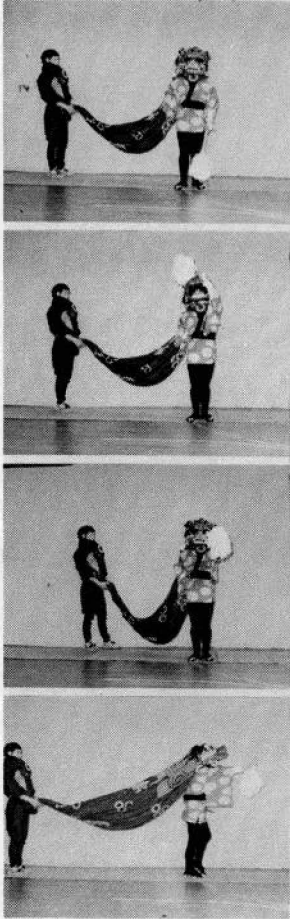


獅子の面



## 6-2 舞ときまり

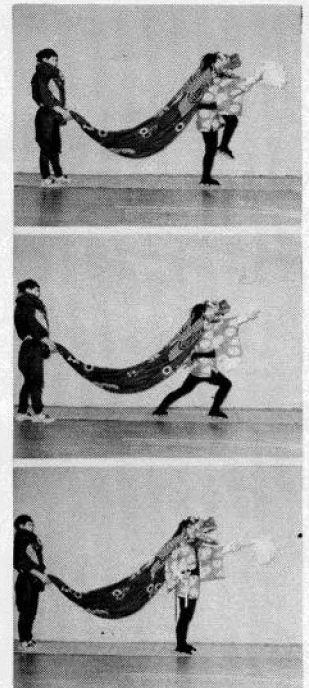
### 悪魔払いの舞 (前進)



獅子舞のプロローグは神楽の渡御である。笛と神旗に飾られた神楽は、拝殿の中で若い衆にかつがれ「チューロレロロ、チュレチュレチュロレロ……」と尾を高くあげた勇ましい下り笛と、力強く打ちこまれる太鼓の響に合わせ、左右にゆっくり揺れながら御神燈の下をくぐり、境内に渡御することになるが、石段を下って待ち構える観衆の期待をじらすように、一たんは拝殿にもどる。いよいよ下りかけとなり階にかかる。石段の両側に待ち構えた小若衆は、手に手に小笹葉を持って神楽にたたきつけ邪悪を払い、神霊を歓迎する。拝殿まで戻った神楽は再び段上に姿を現わす。両三度の下りかけは、山から裾に下る道をさがすような仕草をすることになっている。いよいよ下り始めると、神楽の揺れは一段と激しさを加える。右に倒れ左に傾き、下っては押し上げられ、登るかと思えば下る。待ち構える小若衆の笛も「ホリヤ、ホリヤ」と前から後から横から打ち振られ「ヨイヨイ」と神楽をたたき。御神幸が険しい曲りくねった山の尾根道を古木にすがり、つたかずらをかきわけ、新道を踏み分け踏み分けて上り、下りをした古代の山神を迎える様が数段の階の上で、あくことなく繰り返えされる。境内の観衆は、神楽の下りの早きを尊しとせず、しかし戻るを多く欲せず、はるかな山路を下るのを待ち望むように一喜一憂する。数分で練り終えた神楽が舞場の方面に置かれると、笛も太鼓もテンポが変わり、駆り立てるようにせわしいリズムで構成した呼せ

笛で神の御霊を呼ぶ。一人の連打する太鼓にもう一人が加わり、時折強く打ち込まれる太鼓が響いて刻々とせわしくなり神の到来をつける。一区切がつくと、西の方から東に向かって獅子の悪魔払いの舞が行なわれる。獅子舞の舞場は直径9歩(約4m)のたかはりやちようちん持ちの若衆と人垣に区切られたほぼ円形の土間で、観衆はその前から座り、後に立ち、左右にひしめいて幾重にも輪をつくる。悪魔払いを舞う獅子にとって、その中に踊りるときは、上体を立てて神の鎮める前面と空に強く引かれる。踏みしめる大地からの腰を砕くまでの力にたえ、まわりからは射すくめるような光りを全身に刺させる。だが気のゆるみで思わず姿勢を崩しそうになるという。幸いなことに獅子に

### (後退)





はその構えの大きな支えとなる黒づくめの服装に身を固めた尾ば持の介添えがある。尾ば持は前年若しくは前々年に獅子を奉納した経験の深い助手格の先輩がその任にあたる。舞は左手にへい、右手に刀を持ち、最初は振りかぶったへいを水平に突き出し、左手のへいを手前へ引く時、添えた人差指でわずかに上にはねると同時に右手の刀を勢いよく前へ繰り出す。そのとき紙の部分に刃先があたり、細長く刻まれた白半紙のへいが2～3枚ヒラヒラと切り落されて、舞場に散じ土を彩る。また右手刀を手前に引くと同時に、左手へいを脇の下からくりだす。出発や元に戻る位置では、祈りをこめてへいを大きく振りかぶる。これは神の依り代となったへいをくり出して前面の悪魔をひるませ、次いで神の御業をぎょう集した刀をくり出して打ち払

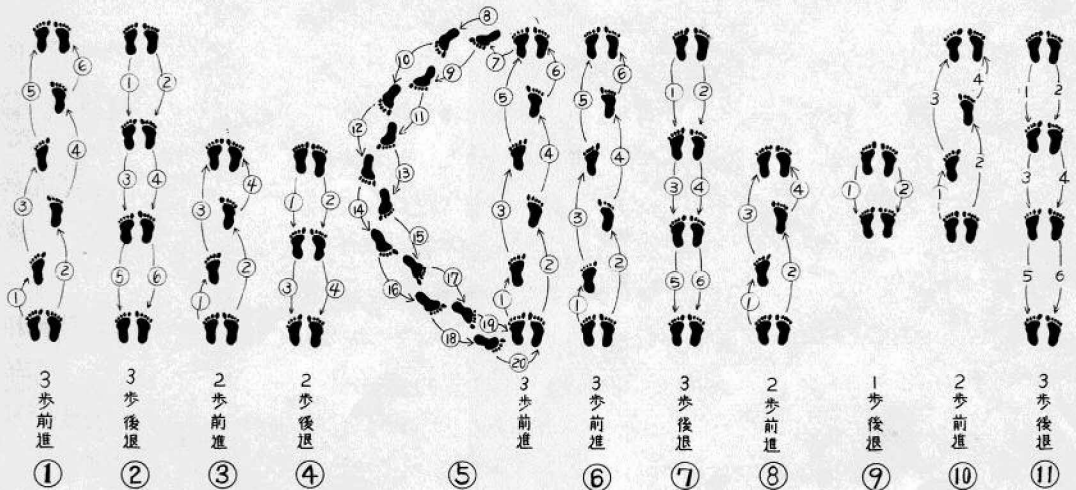
い、紙の散華で場を清めるものである。手の動きについては上記動作を繰り返す。刀は右手掌を下向きにして指はまっすぐ伸ばし、親指と人さし指との間に挟むだけで奉持し、決して相手を切るとか刺すための持ち方をする事なく、あくまでも悪霊を払いひいた刃先を我身に向けて、祈りを澄ませる所作となるもので、殺せる闘いの刀ではないことを意味している。一方足の運びは、バランスとテンポを崩すことなく舞場に歩を運びながら、一本の線上を前進後退したり、定まった半円を描くことは容易ではない。それに足運び一つにしても、すべて足の裏を見せない摺り足をたて前とし、足をあげたときは一担モモを高くあげ、前に強く踏み出すことで強い意志の表現をする。それに引きつける足はゆるく外に回してすべてを掃き清める。

## 悪魔払いの舞

### 足はこびの祈り(獅子)

災害、風害、水害などをまきおこす、地下にひそむ悪霊を鎮めるために踏み歩くものとされ、歩数及び足はこびは下図のとおりである(左足から進み、一步ごとに右足を外に半円を描いて引きつける)

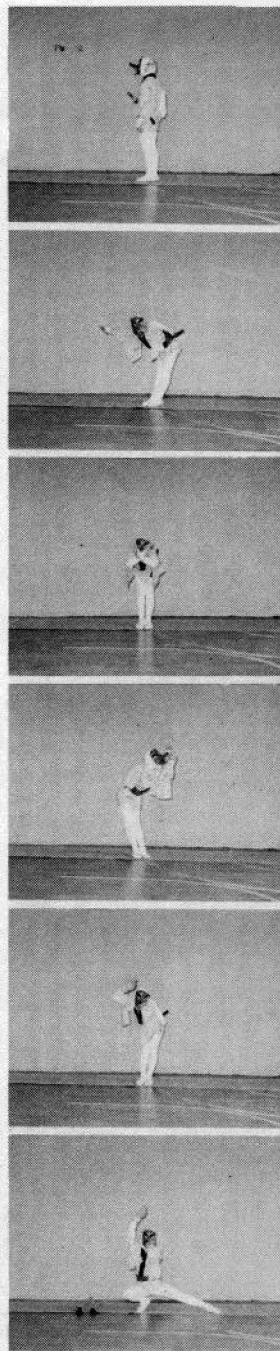
## 拝殿



(1~11 2回行なう)

## ダシ

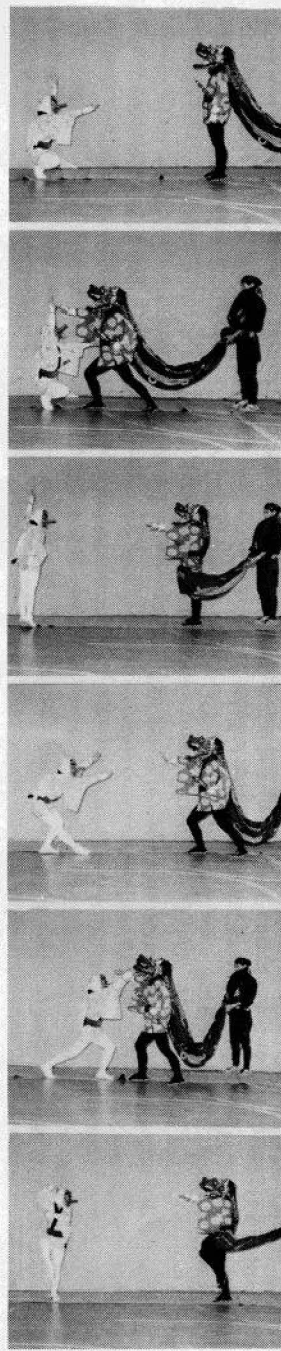
悪魔払いの鎮めから逃がれ山や谷々に巣くひ、木々の枝葉に隠れ残っている各種の悪霊を象徴する天狗だけの舞



また後退の一步はゆるやかに背後の不浄を払い、もう一足のすばやい引きつは姿勢を正す動作に結ばれ、獅子の偉厳と信頼の姿を生み出す表現をとることは、重々しく貫禄があり現世を鎮める権威者を感じさせる。このような足運びには、大地を踏みしめて悪霊を追い払う祈りがこめられている。悪魔払いの舞で世の悪霊を一斉に鎮め、舞い納めると、しばらくはまた呼せ笛が奏せられ、次の天舞に登場する天狗を呼び出す。やがて悪魔払いの鎮めから逃れてまだ山や谷々に巣くひ、木々の枝葉に隠れ残っている各種の悪霊を象徴した天狗の登場となる。天狗は暗闇の中で響く太鼓と呼せ笛の音にまぎれ、舞場の北の隅に後向きの姿でこつ然と現われる。これをダシという。いよいよ天舞となり、笛の調子も変わる。皮を押えて響きを止めたダシの太鼓がテンポも早い、押し殺された響きとなって無気味にたたき出されると、合わせる一本の笛のソロが消えるかと思えば高まり、すすり泣くような細い音色で静まりかえった舞場に流れ、背を向けて立つ天狗の耳に入る。天狗はさそわれるように爪先を動かし、立つたまま舞場に向きをかえ、次に獅子を求めて両手を伸ばし腰をカギに曲げ、上体をそらしたまま、長い鼻が水平になるまで顔を突き出し、前から手首を引きつける。高い鼻と鋭い眼をかくす掌は、指を伸して、鼻先で交叉すると精霊の乗り移りを暗示して指先から震え出す。白い手甲につけられた鈴がチリチリと鳴り、舞場を一段と静まらせる。足の

## 天舞

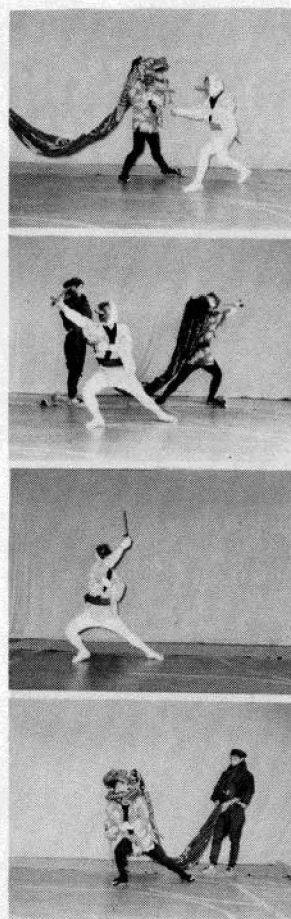
獅子が天狗とからみ、それを慰撫する態を表現する舞で天狗はきまりに従って獅子にからみの演技を見せる。







位置はそのまま、上体だけが獲物を求め左から右に180度づつ5回振られる。やがて笛の音色が次第に高まり、天狗の神がかりの震えが最高潮に達したとき、一打ちの太鼓がひときわ強く響きわたると、その音を合図に天狗は左手をかぶり右手の掌を上に向けて突き出し、大きく一步跳びはねて舞場の中央目がけて飛び出し、片足を伸ばし左右の手をふりかぶる。待ち構える獅子は手をふりかぶり、足をあげて天狗を慰撫するかのように掌を下に向け、差しのべ差しのべゆっくりと活動しはじめる。即ち二番の天舞だ。天狗は手を大きく振りかぶりタスキをひるがえし、軽々と飛びはね、あちこちで素早く動き回り獅子を目がけて様々のいたずらの仕ぐさでからみをしかける。例えば、獅子のあご下に突込んだり、後背を向けてぶつかるからかいや、鼻汁、へいをかますと呼ばれる所作をする。この

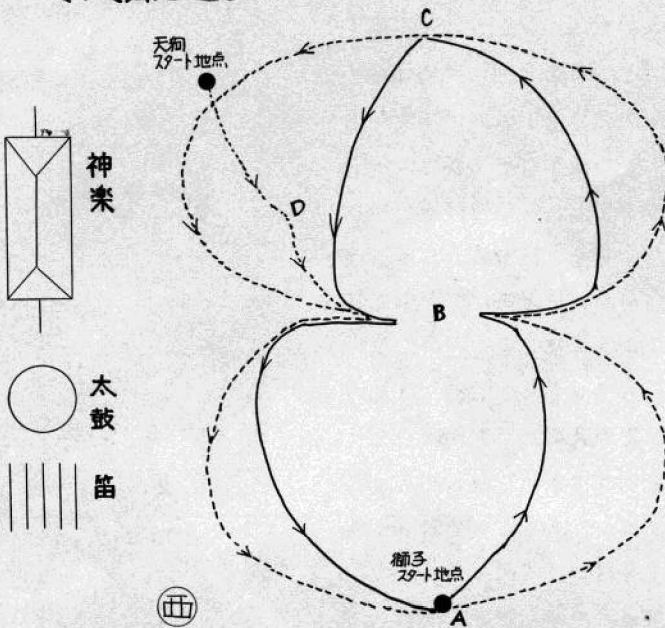


天舞の中では獅子は終始天狗に対して掌を下向きにし、なだめるように差しのべる。天狗は獅子に対して掌を上向き、また上に上にと振り払う。この舞の獅子からは世を鎮める全能の権威者の姿を、また天狗からは何かをまき散らすすまぐれな神を感じるのである。各種の悪さからかいの後、舞の最後には獅子と天狗が腰の刀を抜き放って、2回にわたり刀を合やす。うす暗いたかほりの灯にきらめく刀が「パチッ」と合わされ、火花が散ると、舞場の人垣からは「ほー」というため息が洩れ「いいぞいいぞ」の歓声があがる。これは今も変わらず邪を払うと言う呪術所作に対する人々の期待が強く、また火の花によって物を潔め悪霊を焼くという火の信仰の祈りが潜在しているからであろう。獅子と天狗が介添に連れられ無場を離れ獅子舞が終るといよいよフィナーレの神送りとなる。下り笛には似ているが、上り笛は神を彼方の山に御送りすることで、やや静かなメロディ（チェレレロ、チェレレロ、チェレレロロレ）で途切らさないようにならだかに尾をひき、吹き続けられてゆく。神楽の動きも迎える下りと違って、観衆に

別れを告げるかのようにゆったりとした揺れや動きに変わり、下りと同様小笹に払われて石段を

昇りつめ、拝殿の中へと消えてゆく。

## 〔天舞足運び〕 拝殿



### からみの順

1	前から
2	前から
3	後むき
4	前から
5	鼻かまし
6	へいかまし
7	鼻かまし
8	前から
9	後むき
10	前から
11	刀合わせ
12	刀合わせ

歩数	A~B (A~B)	B~C (B~C)
獅子	3 歩	4 歩
天狗	4 歩	4 歩

—— 獅子足はこび (A-B-C-B-A)  
 - - - 天狗足はこび (D-B-A-B-C-B)  
 獅子と天狗はB点を中心として、たえず対面に位置する。(今C点に獅子がいるとすれば、天狗はA点にいる)

## 6-3 村人の祈り

暗くなり始めた頃、宮の杉の木立の間から聞こえてくる前ぶれの太鼓の響きや、呼せ笛の音色にひかれるように、家々からは御神酒に顔を染め美しく着飾った新婚夫婦や祭に集まった親類縁者、孫の手を引いたおじいさん出稼ぎから帰って来た人など村の人達ほとんどが諏訪社の境内を目ざして集まる。早く着いた人達から正面の最も見やすい場所にムシロなどを敷いて席を取り待っている。やがて例年の通り拝殿の下り口、石段の上手、広場の一角が若者の持ったたかはりで区切られ、そこで舞場となる。人々は直径約4メートルの舞場の回りにひしめて幾重にも幾重にもとり囲み、今や遅しと舞を待つ。呼せ笛が止み拝殿の静けさが舞の近ずきを知らせる。「チエローチエロレエロー」の笛で獅子による悪魔払いの舞が、次に天舞が奉納さ

れる。舞の奉納されている間、村人はかたずをのんで喰い入るように、獅子や天狗の動きを追い、その運びの間にヨッショイ、ヨッショイと掛声を合わす。最後に両者の身体がぶつかり合うとき、刀が合わされる。その時に散る火花を確め、今までの緊張がほぐされるのが、杉木立の枝を震わせる拍手を境に、何かホッとしたムードへと急変する。これは村人たちが春祭にはその年の「豊作と安泰」を、又、秋祭には「収穫への無事と残る年の安泰」を獅子舞にかけて、祈り集まってくるからである。その内でも最後に行なわれる2回の刃合わせで火花が散らないときがあると、村人の顔には一瞬不安の気がよぎる。そのため一回目に合わない時には、二回目必ず合わすようテンポを緩くすることもある。



# 第7章 保存の願い

## 7-1 戦後獅子舞奉納者芳名

年	春 祭 4/15		秋 祭 8/27		年	春 祭 4/15		秋 祭 8/27	
	獅 子	天 狗	獅 子	天 狗		代	獅 子	天 狗	獅 子
S. 47年	竹内俊宏	竹内益裕	折谷晃良	折谷正仁	S. 33年	深松博幸	深松 誠	深松博幸	深松 誠
46	竹内俊宏	竹内益裕	折谷時夫	小林幹司	32	竹内隅夫	小林岩夫	深松博幸	深松 誠
45	折谷隆夫	小林幹司	深松博幸	深松 誠	31	竹内隅夫	長井一己	竹内隅夫	小林岩雄
44	折谷禎一	堀内巧基	折谷禎一	堀内巧基	30	折谷和夫	折谷一己	折谷隆夫	長井一己
43	折谷禎一	堀内巧基	折谷禎一	堀内巧基	29	竹内義則	折谷明一	折谷隆夫	長井一己
42	竹内俊宏	折谷 司	折谷時夫	堀内巧基	28	折谷隆夫	折谷明一	竹内義則	長井一己
41	竹内俊宏	竹内益裕	折谷時夫	折谷 司	27	折谷則之	長井一己	折谷隆夫	折谷明一
40	折谷時夫	竹内益裕	竹内俊宏	小林幹司	26	長井英俊	長井宗一	折谷則之	折谷武男
39	竹内俊宏	長井達夫	竹内俊宏	長井達夫	25	折谷則之	折谷武男	長井英俊	長井宗一
38	折谷時夫	長井達夫	折谷時夫	折谷 司	24	長谷英俊	長井宗一	折谷則之	折谷武男
37	長井静男	竹内益裕	竹内俊宏	折谷 司	23	折谷則之	折谷武男	長井英俊	長井宗一
36	長井静男	小林幹司	長井静男	竹内益裕	22	長井英俊	長井宗一	折谷則之	折谷武男
35	折谷一二三	小林幹司	長井静男	竹内益裕	21	堀内隆司	竹内国一	長井正敏	勝田昭一
34	折谷一二三	小林幹司	折谷一二三	小林幹司	20	長井正敏	勝田昭一	堀内隆司	竹内国一

## 戦前奉納者氏名

### 獅 子

- 長井吉宗 ●長井隆男 ●長井又義 ●小林正男
- 長井幸俊 ●小林保正 ●長井則男 ●折谷要造
- 竹内武芳 ●長井常造 ●竹内源作 ●長井宝得
- 竹内津太郎

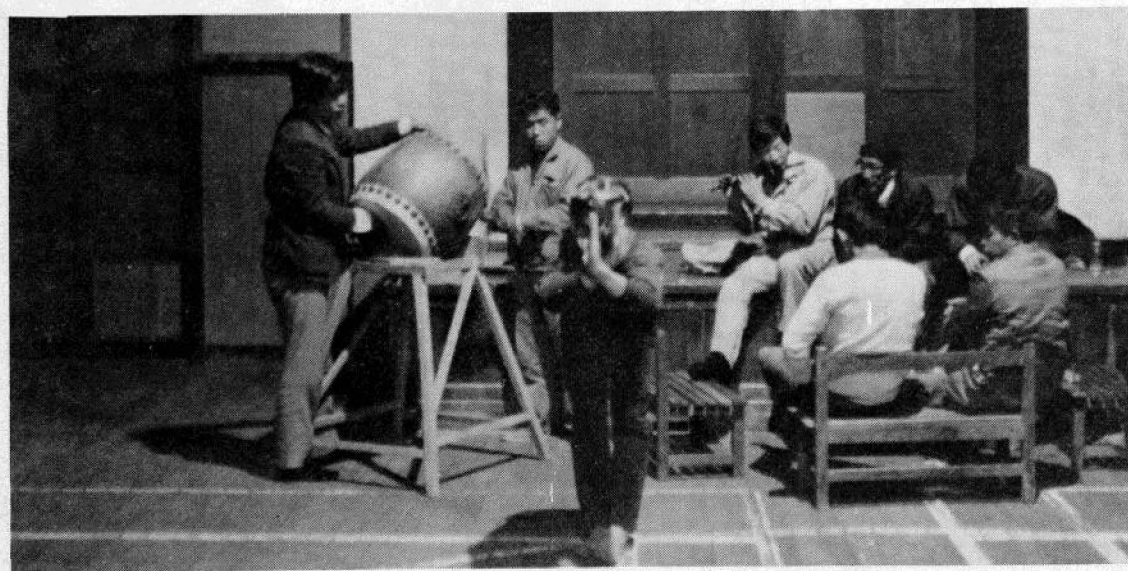
### 天 狗

- 折谷潤治 ●長井宗義 ●長井久夫 ●長井久成
- 折谷林一 ●深松繁良 ●小林弥一郎
- 折谷六郎左エ門 ●竹内伊一 ●長井要松
- 長井改治 ●長井栄二郎 ●長井左義 ●長井金治
- 堀内平作

## 7-2 保存のための活動

戦後も10年を経て、農業もそろそろ経済発展の先頭グループを離れはじめた昭和30年頃から年々獅子舞そのものに対する認識が薄れ、当笹川では一種の伝承芸能の危機の様相を呈した。当時の獅子舞関係者たちは苦慮したあげく、昭和35年になってようやく村人全員でこの獅子舞を保存しようと総会に計り、笹川獅子舞保存会を結成した。この会は村の直属機関として年間約2万円余りで練習や衣掌を新調したり、面などの修理などの活動を展開し、数年間は順調に運営がなされてきた。経済の高度成長がうたわれはじめた昭和40年代へ入ると、青年層の流出による後継者不足から目立って衰退の色を濃くしはじめた。すなわち在村青年の減少や高校大学をめざす青年達の増加により、踊り子の選出にもこと欠く始末となったからである。ましてや笛、太鼓のように高度の技術を要するものは、習う人も皆無となった。そのためハヤシ方は長年同じ顔ぶれで新人の参加もなく、そのうえ中年層の村外通勤から年々一人ぬけ二人ぬけしてとうとう10人弱になってしまった。そして

保存会から村人に召集をかけても集まらない全く無意味な会となった。昭和45年3月26日の保存会総会では、中心になっていた獅子舞経験者及び青年団側からついに「祭事すべてを青年団及び一部の人達たちで行っていたため村人達の関心が薄らぐのではないか、すべての村人達が関心を持って保存させるために、各部落会持ち回りの運営にしたらどうか」という意見が出され、多数で可決された。そして昭和45年4月15日の春祭からこの方式を採用した。これは大変反響を呼び、祭を絶やしてはという壮老年層の気持をかき立て今まで余り関心のなかった人でも参加することとなり・氏神様と獅子舞に対する関心が日増しに高まってきた。この運動と合わせて、無形文化財再見も出た。しかし長年にわたる青年層の活躍で祭事の進められたのに対し、老若を問わず参加する形には芸能の伝承と保存という点では喜ばしいと思うが、祭の意義から見る時、一抹のわびしさを禁じ得ない。





## ≡おわりに≡

「進歩とは伝統を破壊し、過去との断絶によって果たすことができる」と信じる私達と同世代の若者がいる。しかし私達の求める未来像はそれと若干異なり、「数百年いや数千年の過去の価値、すなわち伝統が理解と活用され、若い世代のエネルギーを構造化する現代社会を起点として、人類の英知が限りなく発展し結集する文化の創造の中に得たいもの」とする。そのためには笹川の生活も又、先学の言う「歴史は現在に生きている過去である」として捕え、近年若干の停滞性をみる笹川の過去をより客観的に探求して、祖先の努力とその文化遺産の継承に価値を見出し、それを現代社会の理解に生かし、更に未来への創造の糧としたいと願った。この運動はスタートしてからもう既に4箇年の歳月を経ている。しかし年々衰退する青年団の補強とその準備活動のため、この運動だけに本格的に取り組んだのは、昭和45年に入ってからである。正式には1月25日「笹川青年団獅子舞研究会」として発足した。当初は村の歴史を中心に学習を進め次に獅子舞そのものの調査研究へと発展した。多忙な同人達はその進め方として、各人それぞれ独自で調査研究しながら最低でも月一回は、その資料を持ちより検討しようとした。しかし勤務に往復3時間も費やす者や多忙な者、さらには学習の不慣れから各自の調査研究も思うにまかせず、また月1回の検討会も遅れがちということで、はじめから壁にぶつかってしまった。しかし地区内に朝日町文化財調査委員の竹内俊一氏が居住されている利点に恵まれ、適切な助言を随所で受けようやくその方向を見出した。明るい見通しがつくと同人

達の活動も一段と活発になりピッチがあがった。しかし各人は職場を持ち夜間勤務の人などいたため、全員集まって十分な検討をする機会に恵まれなかったため、4月25日になって今までのまとめをコピー刷りし仮本にして各人2日間を単位として回覧しました。また資料不足を補なうため6月末日までに、地区古老の訪問や、一部獅子舞経験者等の人達との話し合いを行ない、確証あるものにしながら4回書き替えた。その間竹内氏との連絡を密にし、又研究会員同士道路上やバスの中で顔さえ見れば、5分でも10分でも話し合うショートショートの研究方式をとりながらこれを進めてきた。私達は今、批評を受けるためこの冊子を成すことのできたのも、竹内氏をはじめ地区古老の人達、また理解ある村人達の全面的な協力があつたからこそだと思います。各位には紙上を借りて謹んで御礼申しあげます。しかし冊子はなんといっても短期間の調査記述であつたため、資料不足からくる仮設の検証不備、青年らしき独断や幻想も加わり、不十分な点が随所に見受けられます。しかし今後とも、私達は今住む故郷に対し更に深い愛情と理解をもって探り続け、より客観的な歴史像を構成するためと真相究明と資料収集を行ない。より以上の立派なものになしえたいと思います。その意味でも今後の御指導と御鞭撻をお願い致します。(編集子)

(なお本報告書の概要は民俗芸能の会発行の「民俗芸能71春号」誌に掲載されている。)

## 参 考 文 献

なおこの研究調査には、下記の主なる図書及び文献を参考又は引用させていただきました。理解の未熟もありませんが、よい勉強をさせていただきましたことを深謝もうしあげます。

著 名	書 名	シリーズ及び副題	発行年	発 行 所
民俗学研究所	「民俗学辞典」		昭. 41	東京堂
大塚史学会	「郷土史辞典」		昭. 30	朝倉書房
祝 安静	「日本民俗資料辞典」		昭. 44	第一法規出版
山中裏太	「地名語源辞典」		昭. 43	校倉書房
新村 出	「広 辞 苑」		昭. 44	岩波書房
三隅治雄	「民俗の芸能」	日本の民族第 8 卷	昭. 39	河出書房新社
三隅治雄	「民 俗 芸 能」	伝統と現代 7	昭. 44	学芸書院
観世栄夫	「能 と 狂 言」	伝統と現代 3	昭. 45	学芸書院
郡司正勝	「郷 土 芸 能」		昭. 33	創 元 社
フランクホッツ	民 俗 芸 能	日本の伝統 8	昭. 43	淡交新社
宮尾しげを	日本の民俗芸能		昭. 43	鹿島出版会
芸能史研究会	「神楽古代の歌舞とまつり」	日本の古典芸能 1	昭. 44	平 凡 社
芸能史研究会	「雅楽、王朝の宮廷芸能」	日本の古典芸能 2	昭. 45	平 凡 社
大間知篤三他	日本民俗学的大系 8		昭. 35	平 凡 社
芳賀日出男	日 本 の 祭		昭. 40	保 育 社
川勝政太郎	石造美術入門——歴史と鑑賞		昭. 42	社会思想社
小室栄一	「中世・城郭序説」	日本城郭全集	昭. 36	日本城郭協会
大場磐雄	ま つ り		昭. 42	学 生 社
藤森栄一	諏 訪 大 社		昭. 42	中央公論美術出版社
信濃教育会	諏 訪 史 2		昭. 12	古 今 書 院
金井典美	「御 射 山」		昭. 43	学 生 社
文化財協会	「文化財の理解と鑑賞」		昭. 28	新 光 閣
文 化 庁	民俗資料調査収集の手びき		昭. 43	第一法規出版社
古野清人	獅 子 の 民 俗		昭. 44	岩崎美術社
笹川村学友会	笹 川 史 稿		昭. 16	笹川村学友会
坂井誠一	「宮崎村の歴史と生活」	舟と石垣の村	昭. 29	宮 崎 村



♩ = 80~90



に か た - ま - つ - ぎ - か - や - あ



あ は ろ - た - か - こ - ん - ぎ - 水 アア



ドゥイサノ サ サ こ こ は に か - た - っ



ア は - じ - ま - リ い



じゃ アア ドゥイサノ サ サ に

### 溪谷の村・笹川の獅子舞

発行	1972年12月1日
指導と監修	朝日町文化財調査委員 朝日町立宮崎小学校教諭
	竹内俊一
編集	折谷時夫
発行者	笹川地区・区長
	折谷隆夫
	笹川地区・公民館長
	折谷隆一
	諏訪神社・氏子総代
	長井佐恵松
住所	富山県下新川郡朝日町笹川